



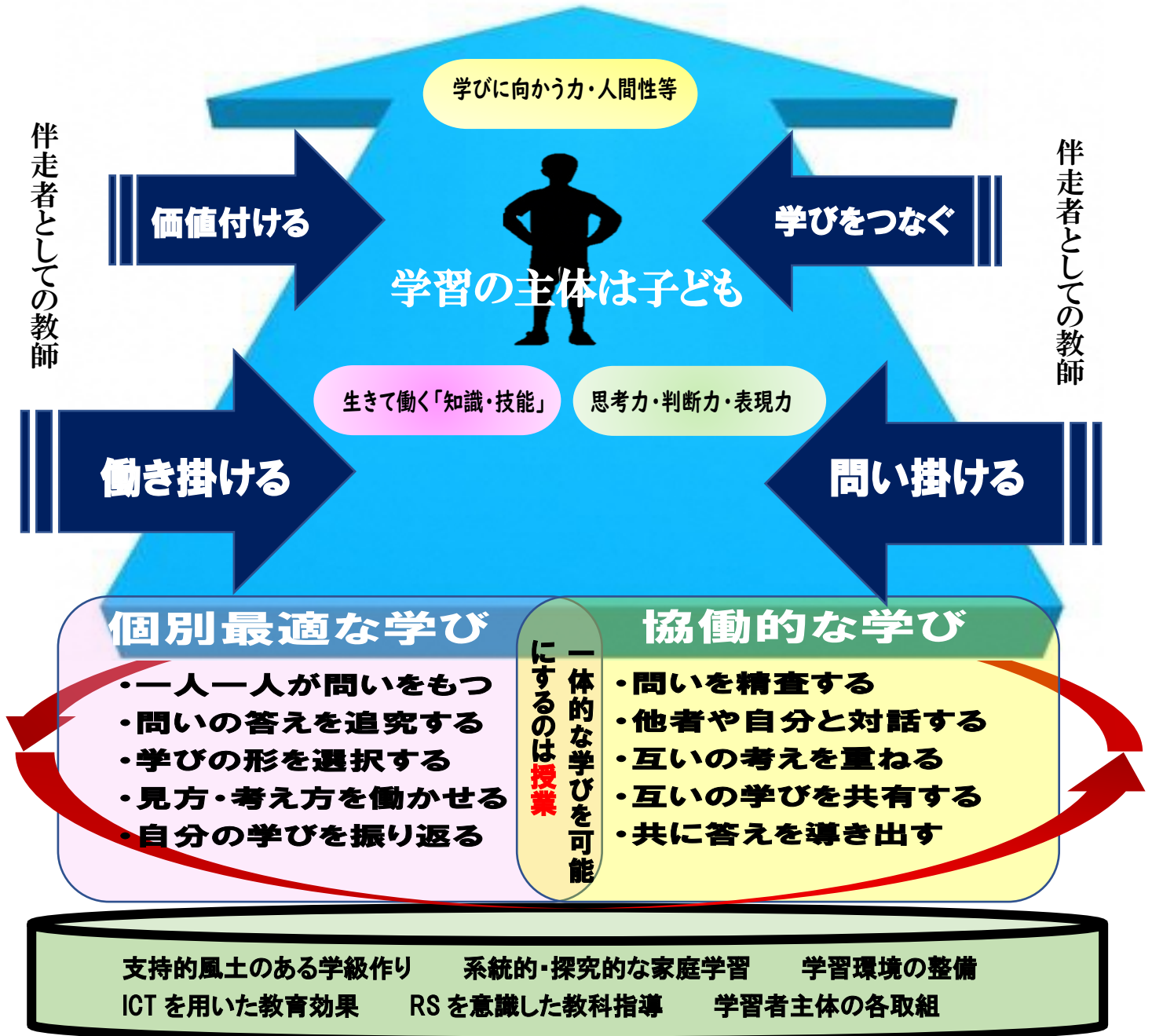
研究の概要

学校教育目標

豊かな心を持ち、心身ともにたくましく、自ら学ぶ子どもの育成

自ら「問い」を持ち、学びを深める子どもの育成

～「個」と「協働」を往還する国語科学習を通して～





単元構成と「問い」の解決場面について

研究仮説①【学習者の問いを核とした単元構成】

国語科「読むこと」において、学習者が抱く「問い」を核とした単元構成を行うことで、学習の主体である子どもが目の前の課題を自分事として捉え、学びに向かう力を高めていけるだろう。

研究仮説②【「個」と「協働」を往還し、学び合う場の設定】

問いの解決を行う際に、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に行うことのできる場面を設定することで、常に学習者が主体となって見方・考え方を働かせ、「主体的・対話的で深い学び」を実現させることができるであろう。

<p>一次</p> <p>二次</p> <p>三次</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○単元との出会い ○「はじめの感想」「はじめの問い」から学習課題の設定 	<p>つかむ・見通す</p> <p>考えをもつ・深める</p> <p>振り返る</p> <p>まとめる・</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○本時のめあて(問い)の確認 ○見通し(既習事項から問いの解決に役立ちそうな考え)の確認
	<ul style="list-style-type: none"> ○構造と内容の把握 ○「はじめの問い」を更新 ○「みんなの問い」の設定 ○「みんなの問い」の解決 		<ul style="list-style-type: none"> ○問いの解決に向け、自分に最適な学びを選ぶ ○それぞれの学びを重ねる・共有する ○学びを深める
	<ul style="list-style-type: none"> ○学習のまとめ ○言語活動 		<ul style="list-style-type: none"> ○学習者による本時のまとめ ○いーすと/いーすと+(プラス) (汎用的に繰り返し使われる力・新しく獲得される国語の力)の表出

【「はじめの感想」・「はじめの問い」】

本単元に入った時、最初に抱く感想や問い。これを基に学習課題を設定し、構造と内容の把握を行った後、問いの更新を行うことで、個人の抱く問いはより深いものとなる。

【**学び**を選ぶ】

本時の問いを、どのような学習形態や資料を用いて解決するかを学習者である児童自身が根拠をもって選択すること。自分にとって最も適切な形を判断することが「学びの調整力」である。

【「みんなの問い」】

更新した個人の「はじめの問い」から、特に学び深めたいものや単元の目標に照らし合わせて練り上げたもの。

【**いーすと/いーすと+(プラス)**】

資質・能力の3つの柱に沿った振り返り。

- い**いいと思った考え(思考力・判断力・表現力等)
- す**すんでがんばったこと(学びに向かう力)
- ど**っておきたい技(知識及び技能)
- +**プラス(学びの調整力について)

①【学習者の問いを核とした単元構成】

学びの見通しをもつ

単元と出会い、児童は学習の原点となる「はじめの問い」「はじめの感想」を表出する。そこから単元の学習課題を設定し、学びが始まる。

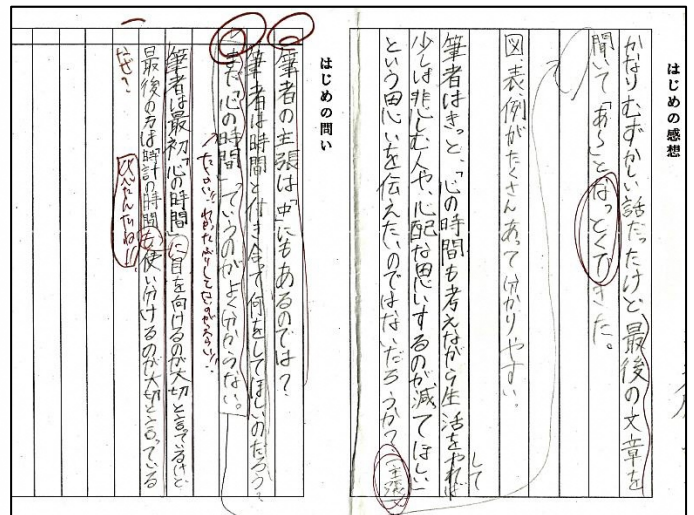
構成やあらすじを捉えると、ある程度の読み違いや浅い問いは淘汰されていく。「はじめの問い」は磨かれ、皆で読み深めるべき「みんなの問い」へと高まっていく。そうすることで学習計画を主体的に立てることができる。

「みんなの問い」を解決するためには、自分でアプローチの仕方を選んだり、どんな考えの相手と話すかを自己調整したりする力が必要である。子どもたちはここで「個」と「協働」を何度も往還しながら資質・能力を伸ばしていく。最後は学習課題のまとめを行い、身に付いた力を実感できるようにする。

「みんなの問い」の内容や数は、常に教師の想定通りにはなるわけではない。だからこそ、教師はより深い児童の実態把握と、問いの想定を教材研究の要とし、事前準備を行っている。

教材名	時間
<p>「みんなの問い3」を解決する。</p> <p>「みんなの問い2」を解決する。</p> <p>「みんなの問い1」を解決する。</p>	<p>3</p> <p>2</p> <p>1</p>
<p>東っ子 国語の授業の進め方</p> <p>単元と出会い、「はじめの感想」「はじめの問い」から学習課題を立てる。</p>	
<p>選ぶ</p> <p>学ぶの形 目的とところ 注目する人物・場面</p>	
<p>話そう</p> <p>同じ考えの人と ちがう考えの人と みんなで 一人で</p>	
<p>まとめよう</p> <p>「問い」の答えを自分の言葉で</p>	

児童が使用する単元計画



児童が使用している「問いシート」例

問いを立てる力を育てるために

本校では6年間のスパンで「問いを立てる力」そのものの育成を図っている。そのため、指導事項からの具体的な問いの例や、各発達段階における「問いを立てる力」を系統立て、そこに沿った指導を行っている。

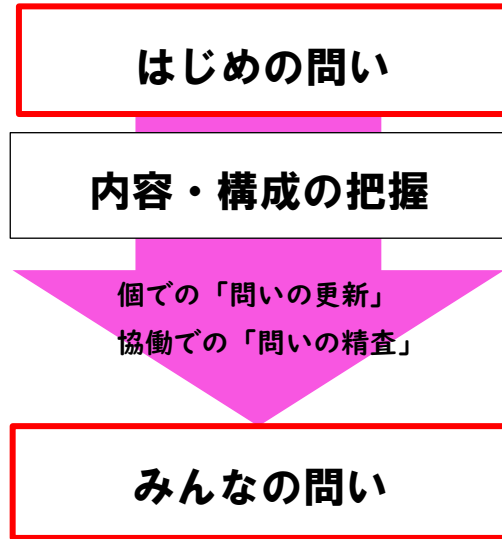
	指導事項に関わる「問い」の系統	例	問いを立てる力の系統
高学年(単・集団で精査し、自分たちの力でやる)	<p>【物語文において】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 直接的又は暗示的な描写により、人物の心情や関係がどう描かれているのかに関わる問いをもつことができる。 ○ 物語の山場の出来事や、人物の変容に関わる問いをもつことができる。 ○ 作者が物語を通して伝えようとする全体像についての問いをもつことができる。 ○ 読後感(楽しみ/楽しさ/幸せ/不幸)のずれて生じる問いをもつことができる。 ○ 情景描写など、表現の工夫に着目した問いをもつことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ なぜ「綾」は「アヤ」という名前を指でなぞったのだろうか。 ○ 太一はなぜ「瀬の主」を打たなかったのだろうか。 ○ 作者はなぜ「五月」と「十二月」の二つの幻灯を書いたのだろうか。 ○ 太一は瀬の主を打たなかったことを後悔しているのだろうか。よかったと思っているのだろうか。 ○ なぜ「大進いさんとガン」には空のことを書いてある文章がたくさんあるのだろうか。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 本文に書いていないことは問わない。 ○ 本文に書いていてもすぐに解決できる問いは、あらかじめ自力解決する。 ○ 「はじめの問い」の段階で、明確な基準で問いを取捨選択することができる。 ○ 小集団で「似ている問い」「包括できる問い」をまとめることができる。 ○ 小集団で「話し合うことで深まる問い」を選ぶことができる。 ○ 一言の場で問いを分類、整理し、言葉を整えて繰り返すことができる。
	<p>【説明文において】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 要旨把握に関わる問いをもつことができる(説明文の型や文章構成)。 ○ 目的に応じた事例や図表の使われ方や効果に関する問いをもつことができる。 ○ 筆者の論の進め方の工夫に関する問いをもつことができる。 ○ 筆者の主張に対する自分の考えに関わる問いをもつことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 「時計の時間を道具として使う」とはどのようなことなのだろうか。 ○ どうしてこんなに多くの資料が使われているのだろうか。 ○ 「田舎種が教えてくれること」はなぜこんなにわかりやすいのだろうか。 ○ 3人の筆者の主張は、どれが正しいのだろうか。 	

問いの系統表(高学年)

「みんなの問い」の要件

- 「この単語の意味がわからない」は、みんなで深める問いにはならない。
- 学習課題から外れてしまうものは、「みんなの問い」にはならない。
- 似ているものや、大きくまとめると含まれるものはまとめる。
- 本文からは絶対に予測できないことや、すぐにわかるものは「みんなの問い」にはならない。
- 本文に書いてあることを基に考えることができ、色々な意見が出て話し合いが深まりそうな問いが「みんなの問い」になる。

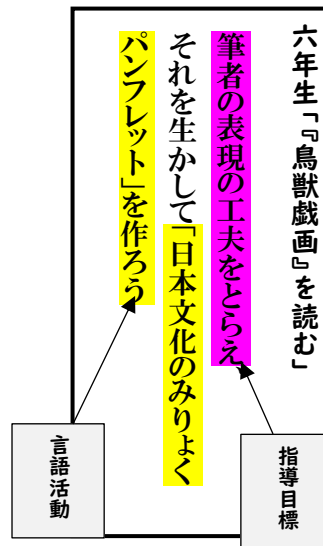
単元最初に立てる「はじめの問い」は、本単元の重点に関わるものも、既に習得済みのものも、ただの単語の意味に関わるものもある。当然、この段階ではどの問いも認める。しかし、学習課題を立て、内容と構成の把握を行った後であれば、個人の「はじめの問い」はある程度精査され、更新される。このタイミングで「みんなの問い」を立てる場を設定することで、学習指導要領に定められている当該学年の目標と、児童の解決したい問いを重ねることができる。



指導目標と言語活動を明確にした学習課題の設定

児童の主体的な学びを支え、資質・能力を身に付けるために必要不可欠なのは、目標に向かう言語活動である。

本校では、単元前の教材研究の段階で、教師が「予想されるはじめの問い/はじめの感想」から「指導目標」と「言語活動」までの流れを予測し、児童がぶれずに、最後まで意欲をもって学びを進めていくための明確な学習課題の設定を行っている。そのために独自の「単元構想シート」を使い、魅力的な言語活動と学習課題、そしてその後「予想されるみんなの問い」などから単元の構成を練っている。



昨年度の学習課題例

児童主語で、単元の目標と言語活動を一体的に掴みやすい言葉に整理し、単元全体の課題とする。

6年
単元構想シート 教材【『鳥獣戯画』を読む/日本文化を発信しよう】

指導目標
◎ 目的に応じて、文章と図表などを結び付けるなどして必要な情報を取りつくり、線の進め方について考えたりすることが出来る。(原111)
◎ 引用したり、図表やグラフなどを用いたりして、自分の考えがわかるように書き表し方を工夫することが出来る。(原111)

言語活動
- 単元学習ガイドブックを作る。
or 日本文化のパレットを作る。
- 単元の文化をテーマにパレットを作る。

予想される児童の【はじめの問い/感想】
【未知なものや出だし/感想】
「こんな絵に面白い場面がある」と初めと知った、びっくりした。
【『鳥獣戯画』の動物を見てみたい】
【文章と図表(絵)の結びつき】
- 絵が面白い
- 絵の描き方が「昔か」と思う
- 絵の描き手が面白かった
- どうして同じ絵を二度も描いているのか
- 二回描いたのは何故か
【文章の読み】
- 何が面白くなるかある。なぜ？
- 絵の形や描き方など面白いものがある
- この文章を読むと絵と一緒に描かれているような感じがする
【絵の感想】
- 筆者の考え(動物)は面白い
- 動物の描き方など面白い
- 昔か、今、昔か、今か
- 「鳥獣戯画」の動物を見てみたい
- この絵は「〇〇」か
- 絵の描き方の面白さ、絵やコマの面白さなど
【みんなの問い】
① いろいろな書き方の工夫にはどんな効果があるのだろうか
児童に問いかけたい問い・考え
文章の書き方、ある、ない、昔か、今か、考える
教師の問いかけ
鳥獣戯画の場面をいくつかの場面を提示し、比較し、声を出して感想を述べてみる
みんなの問い② 文章の進め方、どのような工夫があるのだろうか
児童に問いかけたい問い・考え
文章と図表の結びつき、情報提供、段落の役割を考える
教師の問いかけ
筆者の文章と事例の取り上げ方と関連するところの文章構成について、筆者の評価のみんなの問いなど
児童に問いかけたい問い・考え

学習課題 生かして、日本文化の「パレット」作り
筆者のものの見方や表現の工夫をとらえる学習をします。そのために目標の文化について学習するときを生かせる表現をテーマにパレットを作ります。

【内容把握で押さえること】
- 表音-鳥獣戯画は国宝であるだけでなく人類の至宝だ。
- 絵と文章を照らし合わせるから内容や筆者のものの見方をとらえる。【筆者の評価】
- 絵の取り上げ方【1枚を切り取って提示する。】
- 文章構成-尾括弧
- 鳥獣戯画の魅力

指導事項に関わる、読したい問い(essential questions)
- 絵巻物を実際に見てように感じるほどのような表現からなるだろうか。
- 絵の描き手が描く工夫は、どのような表現から生まれるのだろうか。
- 高僧さん一人にいろいろな表現になったのはどのような表現が育ったのだろうか。
- 「鳥獣戯画」の動物を見てみたいと思ったのは、どのような表現が生まれるのだろうか。
- こんなに上手に描くのは、どんな工夫がされているのだろうか。

教材研究で使用する「単元構想シート」

普段の授業では、このシートを使って学年での共通理解や予想される児童の反応等を話し合い、指導を展開している。

②【「個」と「協働」を往還し、学び合う場の設定】

学びを選ぶ

私は～から考えたい（目を付ける項目や内容の選択）
 私は一人で考えたい/困っているから誰かに教えてもらいたい
 私は意見の違うあの人と話したい
 私は意見の同じあの人と話したい



仲良い友達と話したけど、うまくいかないな。
 3人で話したけれど、本当にこれで解決したと言えるのかな。
 よかった。〇〇さんと話してすごくよくわかった。
 前の授業で関係のあることを話したぞ。ノートを見返してみよう



これまで画一的で教師目線だった「個に応じた指導」を捉え直し、学習者である子どもが自分のアプローチ視点や交流相手を「根拠をもって決める」場を単元の中に位置付けた。

交流に入るタイミングも、学習者の調整力に委ねている。もちろん、失敗する選択もあるだろうが、そうやって試行錯誤することそのものが、学びの調整力を育むことにつながっていく。

【目的に応じた ICT 活用（共有）】

右図は、5年教材「大造じいさんとガン」で用いた共有スプレッドシートである。シートの列は本人以外操作することができないようプログラムしている。

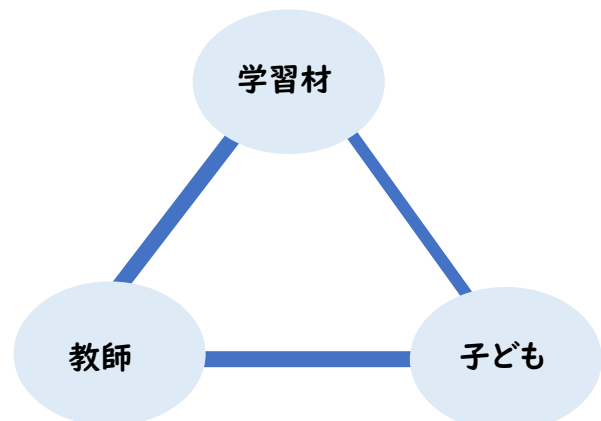
「全員の状況を全員が瞬時に把握できる」という ICT だからこそ可能な強みを国語科に生かしたツールである。周囲の状況を知ることが、学びを選ぶ根拠の一つとなる。

	B	C	D	E	F
			話したい情景描写	聞いてみたい情景描写	その他
1	A 児		4	5、7	4番なら教えられるから気軽に話しましょう
2	B 児	③・④		⑤・⑦	
3	C 児	③			3 真っ赤に燃えてって何がしたいのかわからない
4	D 児		4	5、6	
5	E 児			③	
6	F 児	②		5 7	7番を教えてください... (聞いてみたい) 5番は、OK!

スプレッドシートで話す人を決める（5年：大造じいさんとガン）

学びを重ねる

同じ内容や項目を選んでいても、目をつけた叙述や根拠は異なる。また、児童同士の言葉の方が、時に子どもを納得させることがある。この場面では、存分に国語の楽しさにひたりながら他者と協働し、学びを重ね合わせることができるよう、教師は優れた伴走者としてサポートする。自分、他者、学習材の間を何度も往還しながら、「個」の考えを深めていく。



学びを深める

本単元でねらう資質・能力の獲得のため、教師は児童が自力で達成した学びを価値づけ、認めた上で、その力を決定づける働き掛けを行う。

ここで児童は、無自覚に働かせていた「見方・考え方を、はっきりと自覚できるようになる。

教師・児童・学習材の3項が協働的に学びを練り上げていく最後の段階と言える。



情景描写って、必要なの？
なくてもいいのではないですか？



いや、あった方がいい。
でもなぜぼくはそう感じるのだろう？

学びを振り返る(いーすと)

本校では、「いーすと/いーすと+(プラス)」というキーワードで振り返りを行っている。3つの資質・能力に即した振り返りによって、子どもたちの学びを確かなものにしている。

また、「いーすとプラス」は学びの自己調整に関わる振り返りで、自己決定や選択があった授業の際、自分の自己調整がどうであったかを評価するために書く。昨年度から、主に高学年では家庭学習の1つとして「いーすと」を位置付け、時間的な自己調整を行えるようにした。

EAST/EAST+

- い** **い** **い** **かんが**
おも **かんが**
~という考え方を使うと、今日の「めあて」を解決(かいけつ)できた
- す** **す** **す** **わさ**
おん **わさ**
で **わさ**
がんばったこと
わたし **わさ** **す**
今日は~の活動を進んでがんばった
- と** **と** **と** **わさ**
と **わさ**
って **わさ**
おきたい技
おん **わさ** **わさ** **わさ** **わさ**
今日学んだ~という技は、他の学習でも使えそう
- +** **+** **+** **わさ**
プラス **わさ**
今日の学習の振り返りは、~することができるようになったので+だったよ。

思考・判断・表現

学びに向かう力

知識及び技能

学びの調整力

いーと思った考え	やまなしの12月のことについて話し合ったときに始めは何も意見や考えが出なくて賢治さんの気持ちや理想、夢などと重ねて読むとたくさんの言葉が出てきたからみんなの問いを解決するためにはイーハトーブの夢とやまなしの物語を重ね合わせてからこれからは解決していきたいです。
進んでがんばった...	自分の意見と、 ■ さんや ■ くんの意見を発表し合いながら2つの間にまとめることを頑張った。私と ■ さんは高畑さんはどのような書き方の工夫をしているのだろうかというはじめての問いを立てていたけど、 ■ は、その工夫をすることでどのような効果が得られるのだろうかと言う別の問いを立てていて、はじめは一緒だねとなったけど、よく考えてみると違うなと気がついて、そこからまとめるのが大変だったけど「やまなし」のときよりかはうまく立てることができた。
とっておきたい技	今日の話し合いで最初に5月と12月はどういう世界なのかというのを考えてからなぜ対比させるかというのを考えました。こういう話し合いをするときには最初に今までの学習の復習(おさらい)をしてからするとなぜ対比させているというのが考えやすくなるので、いきなり対比の問題を考えるのではなく復習したことからがながえるというのをこれから使っていきたい。

【目的に応じた ICT 活用 (自己調整の継続的な記録)】

子どもたちは、自分の端末の中に「いーすと」のスプレッドシートを持っている。このシートは個人保管のため、毎年クラスルームに提出すれば教師や子ども同士でも閲覧可能である上に学年が上がっても前年度の記録を失うことなく自己調整の積み上げができる。

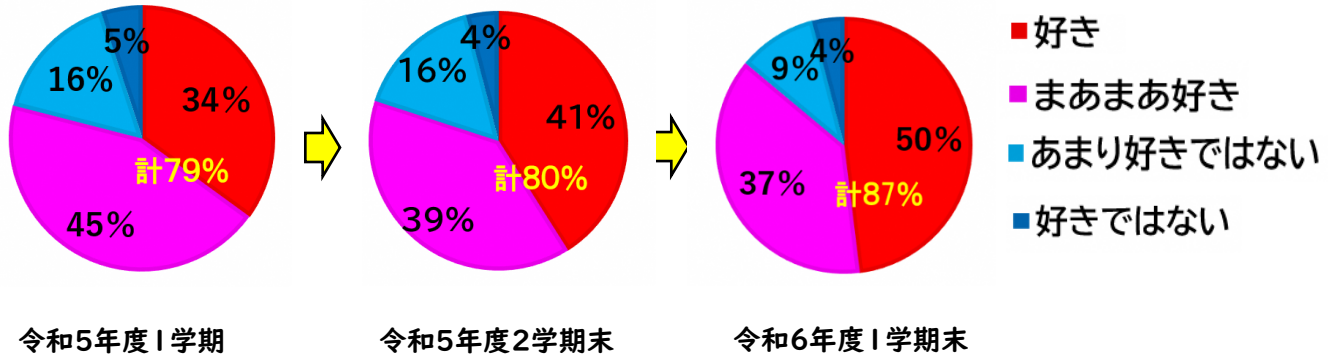
「自己評価の記録と保存・相互閲覧が継続的にできる」という ICT だからこそ可能な強みを生かしたツールである。

成果

【「学びに向かう力・人間性等」の意識に関わって】

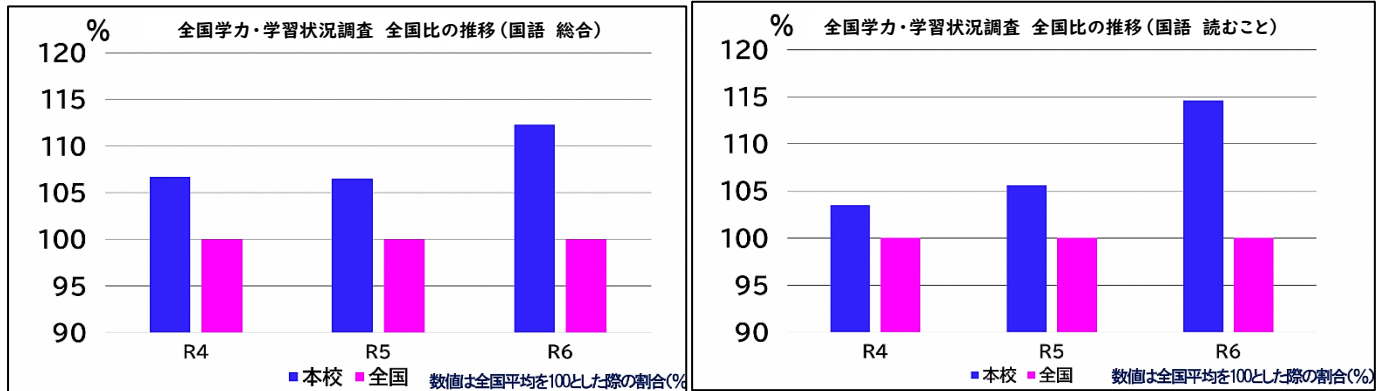
○国語科意識調査アンケート結果より

「国語の『読む』の学習は好きですか?」(全校児童:約500名)



県指定研究が本格スタートした令和5年度より、児童の国語科への意識は好意的な方向に高まっている。特に、強く「好き」と回答した児童の割合は16%増え、「あまり好きではない」と回答した児童の割合は7%減っている。また、同アンケート内で「どんなことが好きか」と追質問を行ったところ、「どんなお話わかる」「問いの答えを考える」「話し合っていくうちに深まる」を選択した児童の割合が増加していることから、本研究の単元構成が児童の内発的動機付けとなり、国語科に好意的な印象をもつよう変化していることが推測できる。

【学力調査における「読むこと」及び総合的な国語科学力に関わって】



長崎県学力調査、全国学力・学習状況調査共に総合及び読むことの正答率が伸びている。特に、令和6年度の6年生「読むこと」は、全国平均を10%以上上回る結果となった。このことは、読むことを中心領域に据えて3年間指導を行ってきた本校の成果と言える。

課題

- 「問い」を立てる力を全ての子につけるための系統的な指導の在り方
- 学びの自己調整が苦手な児童の力を高めるにはどうすればよいか
- 「個別最適な学び」「協働的な学び」を全教科・領域で深めるためにはどのようにすればよいか